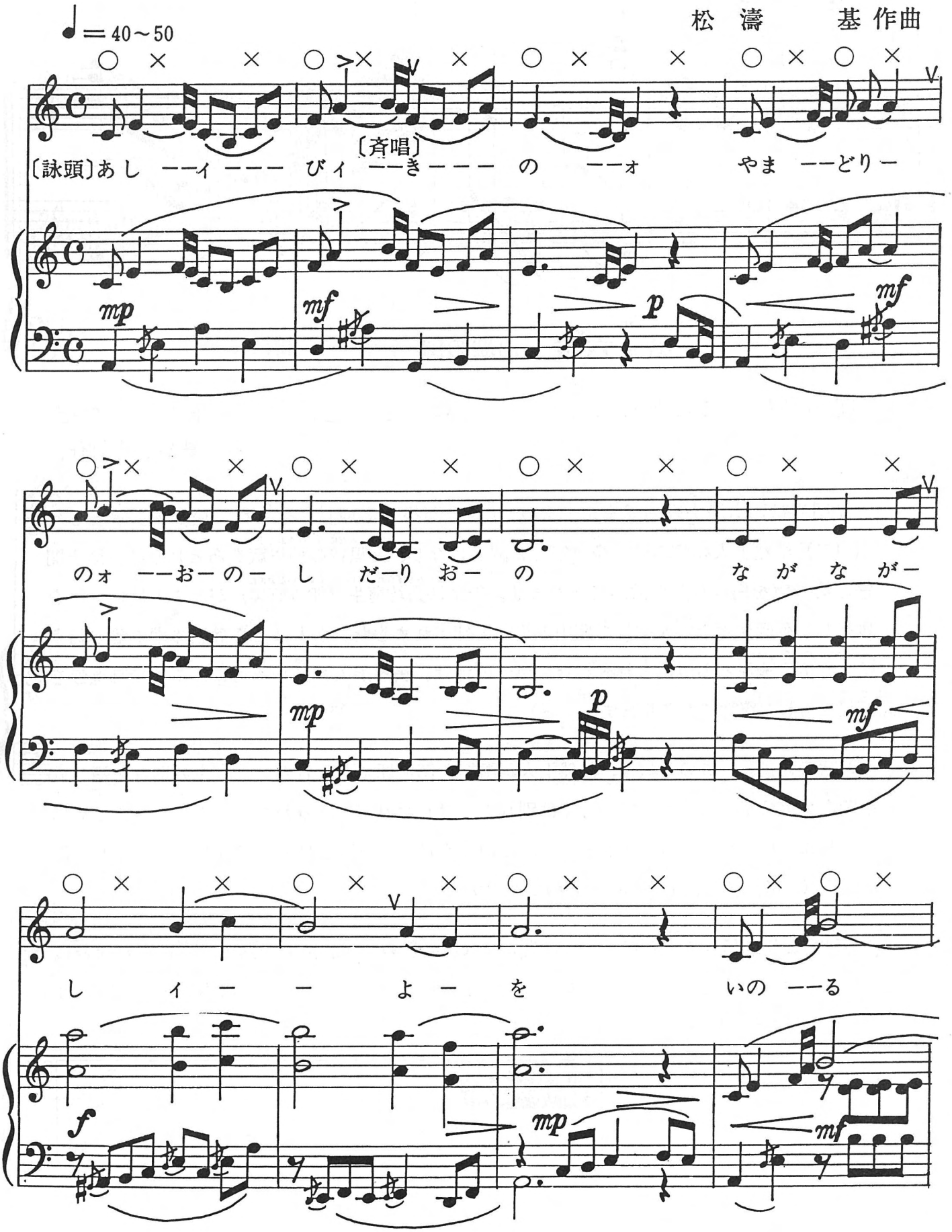
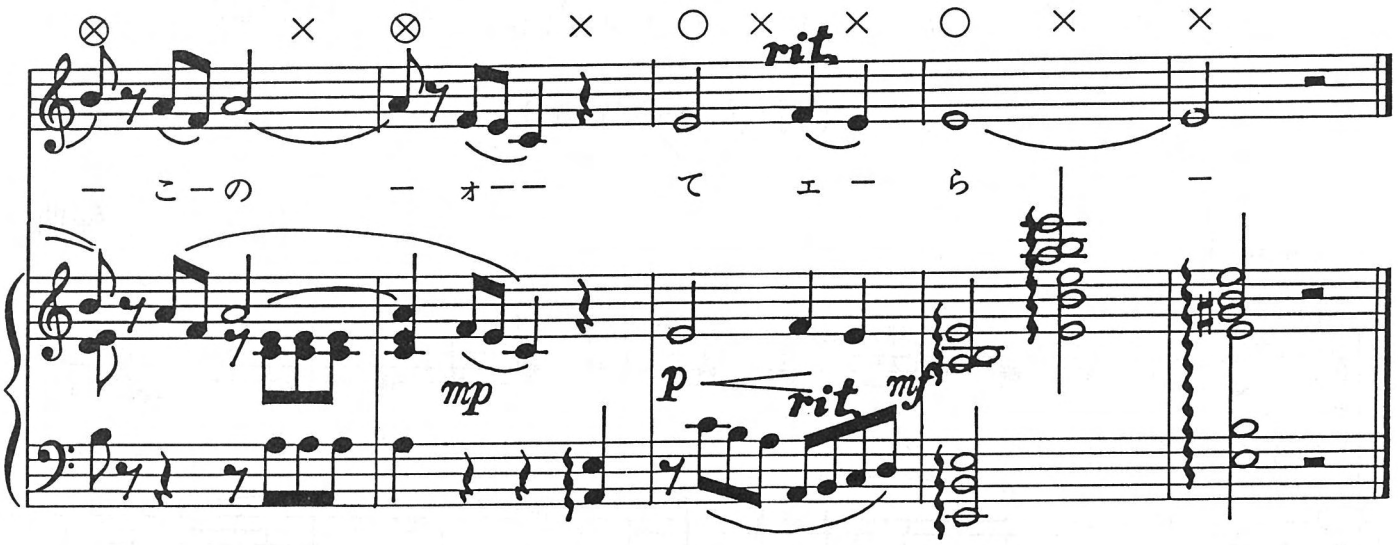
第十七番　二尊院の御詠歌（誓願調）

松　濤　　基 作曲

第十七番　山城の国 嵯峨　二尊院

あしびきの　山鳥の尾の　しだり尾の　永々し世を　いのるこの寺

（摂政関白二条康道作）

二尊院は、法然上人がお念仏の道場とされ、その後お弟子の湛空上人が再興されたお寺で、法然上人滅後16年目に、粟生の光明寺で御遺骸が荼毘（だび）される前に一次安置され、また荼毘ののち分骨された霊地であります。お釈迦さまはお念仏をしてこの世からお浄土へ往生することを勧められ、阿弥陀さまはお浄土から私たちを導いてくださいます。この釈迦・弥陀の二尊がおまつりされていることにより、二尊院と呼ばれています。ここには法然上人の代表的な肖像の『足曳（あしびき）の御影（みえい）』がまつられています。九条関白兼実公（くじょうかんぱくかねざねこう）が絵師の琢磨法眼（たくまほうげん）に命じ、上人が沐浴（ゆあみ）されたあと、足を伸ばして休んでおられるところをこっそりと写しました。後日、上人がご覧になり驚いて祈念されると、たちまち投げ出した足が引き込まれたといいます。

二条昭実公は徳川家康、将軍秀忠公と三名連署して「禁中並びに公家諸法度」を制定し、再度の摂政関白を五年間努め、病を得て辞任された日、元和５年（1619）７月14日に没しました。摂政関白二条康道公は、父昭実公が葬られた二尊院に詣で、その縁起に感激されました。戦乱に明け暮れた戦国時代から、殺し殺され、天災地変が打ち続く災難に人々は苦しみ続け、ようやく太平の世がおとずれました。康道公は、二尊にひたすら祈り、お慈悲を願って、とっさに柿本人麻呂の歌に託して、この歌を読まれたといわれています。

大意　どうぞ戦乱動乱天災なき清き平和な世の中が永く続きますよう、御守りください。
南無阿弥陀仏

ポイント注意

- 「あし・びィ・やま・どり・のォ」はシンコペーション、声の立ち上がりをソフトに、また三拍目はかるくアクセント。